

## 早期英語教育の試み (2)

——遊びと環境設定を中心にして——

長 崎 幹 彦

### An Experiment of Teaching English to Pre-school Children

— On the Meaning of Playing Games and Preparing an Enjoyable Environment —

Mikihiko Nagasaki

はじめに

国際化時代の昨今、英語は単に英語圏の人たちの言語というにとどまらず、国や民族を越えたコミュニケーションのための言語として、共通言語ともいえるべき姿に変化してきている。にもかかわらず日本人の多くは、あらためて英会話教室に通うなどして勉強しなおさなくては、英語を口にできないのが現状である。「文法は知っていても、毎日の生活で使われることばや話し方を驚くほど知らない」、とよく聞く。我々は英語の何をどのように教えられたのであろうか。その原因を考えると、近々行われる教育課程の改訂にともなう、小学校へ英語教育が導入される見通しとなったことは大きな意味をもっていると考えられる。しかしながら、これまでの我が国は公立小学校での英語教育の経験をもっていない。したがって、教員養成、学習内容、中学校との関連性等々、解決しなければならない問題が山積み状態といって過言ではあるまい。また、最近では英語教育をとりいれている幼稚園もあり、小学校への関連性という点で幼

児教育の教員養成をする立場からも考えておかなければならない状況があるように推察される。

本学のマザー・グース研究グループ“The Joint Mother Goose Research Project”では、メンバー各自の教材研究という形で、過去3年間にわたり様々な角度からマザー・グースについての研究をおこなってきた。筆者も担当している「幼児音楽特別研究」のための教材研究として、マザー・グースを学びだしたことをきっかけとして英語に接してきたわけであるが、小学校への英語教育導入の問題がクローズアップされてきたこと、言語習得には音(音声)とそのリズム、あそび・あそびうたといった「音楽との共通項が多い」という点で、英語担当者との共同研究として早期英語教育について考えることとなった。

#### 1. 早期英語教育について何を考えるか

筆者は10年以上、小・中学校で音楽を担当し、現在は幼児教育科で音楽関係の科目を担当している。英語教育の経験は持っていないが、これまで行われてきた英語教育における

問題点、現在進行中の小学校への英語教育の論議を見聞きするとき、「ことば」の持つリズム感や抑揚、あるいは体の動きとの関係といった音楽的要素に重きをおき、かつ、「あそび」をともなった教育内容や方法が、今以上に重要視されなくてはならないのではないかと考えるようになった。

我々がこれから研究しようとしている幼児期は、何ごとにつけ「あそんで体で覚える」ことがほとんどといってよい。幼児は自分が楽しいと感じ関心を持ったことには、驚くほどの集中力を発揮し吸収力も旺盛である。環境がよく情緒も安定していると、集中が1時間近く持続することもある。そんな時の幼児は、気に入ったことを飽きるまでくりかえす。ときにはそれをいく日もくりかえすこともある。「どの子も育つ育てかたひとつ」の言葉を残した才能教育の鈴木慎一はこの点に着目した。幼児の誰もが母語を習得し成長してゆくことにヒントを得てヴァイオリン習得のための教育システムを考え、早期教育の効果を実証した。彼の考えた、「母語の習得には聴覚が重要な位置を占めている」、「くりかえし聴き、練習することで覚える」という考えに対し、「外国語の習得もまた同じではないか」という思いが、この研究の発端にはある。そのとき、音楽的要素と「あそび」をともなった学習が、これから発達していこうとしている幼児の感覚に自然で無理がないことは、育児や幼児教育を体験した者はよく知っている。

研究の目的は、英語が生きて身についたものとなるためには「より早期から英語に親しむ必要がある」、という立場に立脚した教育方法の開発である。本稿ではその第一歩として、つぎにあげる点とその周辺で重要と考えられる事柄について概観することにより、異分野

の、しかも早期英語教育に未経験のメンバーが相互の専門分野の理解を深めること、さらには未知の部分について学ぶことで、これまで我々が「学習すること」について体験的かつ漠然と感じたり捉えていた事柄をできるだけ明確化することで、目標達成の見通しをたてたい。

- (1) 幼児の「あそび」と「学習」
- (2) 母語習得の過程
- (3) 言語とリズム
- (4) 日本の英語教育の問題点と小学校への英語教育の導入について

## 2. 幼児の「あそび」と「学習」

発達心理学からみると、幼児期の子どもの発達に「あそび」は必要不可欠といわれている。秋葉英則等は、『幼児とあそび』の中で、なぜ必要不可欠であるかについてつぎのように述べている。

その問いに答えるキーワードは、二つである。ひとつは、話しことばであり、他は、社会性であり、一略— ことばによる自己表現で他者と交わる力を獲得するためである。

—— 中略 ——

生活習慣、表現、認識活動(身体運動、描画・造形、音楽、絵本、紙芝居、童話、劇、観察・見学等々)、さらには、仕事(労働)といったさまざまな活動が幼児期の子どもの育ちあいの場に準備されている。したがって、幼児期の子どもの発達をうながすうえで、これらの個々の活動の位置づけとその統一的把握が求められるものである。(p.18~28)

三歳、四歳、五歳(六歳)の発達年齢にち

がいこそあれ、あそびがもたらす心理的特質は共通であるといっていだろう。

そのひとつは、働きかける対象（物）へのイメージ（意味の付与）である。

ふたつには、そのイメージに盛りこまれる大人社会の反映である。

そして、人間相互の関係の理解と自己表現であろう。

これら三相は同時進行的に推移し、大人が時折もちこむ、より高次なストーリーの展開によって個々の子どもは、発達に応じ自分なるものを表現していくことになるのである。

そこに織りなす表現内容は、自主性、忍耐力等の性格的特性を他者（仲間）との関係で獲得しつつ、対象（物）に対する観察力、対象と他者（仲間）との関係を意識しながら展開する身振り表現・言語能力をもわがものにして構成されるものである。それは、文字どおり幼児期の子どもの人格発達（性格と能力の総体）そのものなのである。それゆえ、あそびのゆたかさは、「自分なる存在」を執拗なまでに他者を意識して展開するものである。その「他者を意識する」という側面は、「自分づくり」に精をだすことにつながり、前述したように「見たがりや、知りたがりや、やりたがりや」の自分に気づかせることになる。—略—ここに、課業なる受け皿を準備する必要があるのである。(p.43～44)

人間が生きていくうえで必要な基礎的な資質は、獲得しやすい時期（最適時性）があるのであって、その時期をのがすと獲得しにくい（修復に必要以上の時間がかかる）という事態が発生するからである。それだけに、各発達段階にそって必要な教育的とりくみをもって、「発達を保障する」ことが求められるのである。(p.48)

最近は、「あそび」とその意味あいを見無視し、より上の知識へ結びつけることだけをねらい、また、そうしなければ生存競争に負けてしまうかのように喧伝してはばからない頭でっかちな内容の早期教育が見受けられる。その内容は、先に出てきた認識活動の要素を取り扱っているようにみえながら、そこに個々の子どもの自発的な欲求から生まれるはずの主体性を見出すことは少ない。子どもの実生活との脈絡はなく、単に条件反射的に記憶されるだけのものであって、これまでみてきた「あそび」と「個々の活動の位置づけとその統一的把握」に対する配慮がなされているとはいえない。そこで得られるものは、生きた働きをもってつぎへ発展していくことのない、その場かぎりの閉じられた世界のものでしかないのである。

大浦容子は、「音楽行動の熟達化」の中で、特別な訓練があったとは意識できないもののいつの間にか一定水準の遂行が可能になったというような種類の熟達を考えるために、Soloboda が主張する「練習を通しての熟達 (productive expertise)」（以降、「練習経験」という）と「享受を通しての熟達 (receptive expertise)」（以降、「享受経験」という）の二つの熟達化に注目し、その差異について述べている。簡潔に言えば、「練習経験」とは、組み立てられたメソッドでくり返し練習（訓練）することであり、「享受経験」とは、子ども自身が自らの欲求にしたがって環境から体得していくことである。  
（『音楽行動の熟達化』、『児童心理学の進歩』1996年版, p.108）

これらのことから導きだされてくる重要な要素は、「あそび」とは「享受経験」のことで

あり「環境」によって大きく左右される、ということである。

「環境」は、子どもが身につける文化を決定づける基盤となるもので、親や社会の生きざまの全てが反映され、よくも悪くも子どもはそこから学びとり成長発達していく。したがって、知的発達の最初期段階である乳幼児期の環境設定は最も重要であるといえる。あそんでいるからといっていつも学習が成立するわけではなく、大人が、活動する子どもの状況にあわせてその欲求に応えつつ、さらなる欲求を引き出すように柔軟に対応することで、子どもの主体的活動の中に「学習」が成立するよう整えられていなければならない。それが「学習」の原型であろう。

次項の第1期から第3期にかけての母語の習得が享受経験との結びつきで行われていることは想像にかたくない。第二言語の習得過程においても、この「享受経験」が重要な意味を持つことになる。ネイティブにより近い感覚を育てるためには、聴覚の発達や発声器官の成長・発達からみて、練習経験に先だって、なるべく早期に享受経験のための「聞く喋る」英語環境を設定することが重要であり、「読み書く」ことも、あくまで自発性を尊重した結果として導きだしたいものだ。小学校への英語教育の導入にあたって、享受経験を度外視して練習経験を追及するだけでは、効率的な学習は望めないのではないか。

### 3. 母語習得の過程

#### (1) 母語におけることばの発達

子どもが出生して最初に出会うのが「音」、それも「ことば」である。幼児のことばの発達過程は、つぎの4期に分けられる。

第1期(出生～1歳前後)の「前言語期」

第2期(1歳前後～3,4歳)の「基本的言語システムを形成する時期」

第3期(4,5歳～9,10歳)の「音声言語が伝達の主流となり、文字の習得など言語を通しての組織的教育が始まる時期」

第4期(10～11歳以上)の「言語による抽象的思考の発達する時期」

(『新しい幼稚園教育要領とその展開』, p.83)

また、三輪弘道の『幼児の心理と保育』によれば、

- (1) 幼児が言葉習得するための前段階として、「聞く」とことと「声を出す」という行為の準備と学習が必要である。
- (2) 生後1年間は「聞く」ための準備の時期であり、受けている様々な音の刺激の中から、自分に意味のあるものを聞き分ける学習をしている。
- (3) はいはい、つかまり立ちによって胸式呼吸を獲得することによって、声の強さ、長さ、高さに変化が出てくる。10ヶ月頃から成人の音声の模倣、11ヶ月頃から喃語から有意味語への移行が現れる。
- (4) 1歳から3歳までは「ことばを知る段階」といわれている。特に、ことばによって自分の行動を統制できるようになるのは2歳以降である。すなわち、3歳ごろは「なぜ」「どうして」というように何でも聞きたがり、4歳前後では獲得した言葉を誰かれなしに使いたがる多弁な時期である。

また、これまでの心理学研究によって、2歳ぐらいまでに言葉の刺激を受けとっていない

ければ正常な能力は発達しない。2歳をすぎても適切な刺激を受けていない時は、言葉の発達の遅れをとりもどすことは困難になることもわかってきている。(p.13~14)

つぎに、言葉の発達過程での親子の関係について見ると、およそつぎの8項目があげられる。

- (1) 出生直後からの母親の言葉がけとその声の調子
  - (2) 子どもの発する音声を母親が理解し応答を返す
  - (3) 動作表現に言葉を付随させる
  - (4) 喃語期には喃語で応答し、模倣の心を育てる
  - (5) 4・5か月では、不十分な言葉使いを言い直す(拡張模倣) ことにより子どもの理解、表現力を高める状況をつくりだす。
  - (6) 母子間で言葉遊びを楽しむことで、言葉の使用の柔軟性や恣意性を付与する。
  - (7) 興味を持った絵本を繰返し読み聞かせ、質問に応じたり、言葉を通して創造の世界に導入する。
  - (8) 子どもの知っている単語を中心に、短い文章でわかりやすく話す。
- (『新しい幼稚園教育要領とその展開』, p.84)

このように見たとき、「狼に育てられた子ども」の例を出すまでもなく、ことばの発達にコミュニケーションがいかに深く関わっているかがわかる。

本研究での対象年齢は第2期から第3期の中期までということになるが、ここまでみてきたことからだけでも、第1期から第3期までの子どもが、「ことば」の全てを子ども自身

の内的欲求から出てくる「あそび」から獲得しているというこがはっきりした。「読み書き」が教育システムとして開始されるのは「聞く」・「話す」の基礎がある程度固まった第3期後半、すなわち小学校入学以降である。

## (2) 医学的にみた言語習得

言語習得のメカニズムの研究は言語学や音声学の領域だけでなく、心理学や脳生理学の立場からも進み、それぞれが他分野を無視して研究を進めることができない状況になってきている。特に脳の左右両半球が言語習得に果たす役割を解明する研究には注目すべき結果がでている。

人間の脳は左右二つに分かれている。言語は主に、左半球にある「後言語野」(ウェルニッケ)や「前言語野」(ブローカ)で取り扱われる。この「後言語野」に隣接して「聴覚野」(「ヘシュル回」、これは右脳にもある)があり、互いに密接な連携を保っている。言語活動の四つの機能、「聴く」、「話す」、「読む」、「書く」の内、「聴いたことばの意味を理解する」能力がもっとも基本になる。出生直後の「後言語野」は、ことばについてまったく何も無いからっぽの状態であるが、家族の話しかけから(言語の如何に関わりなくそれを母語とするために)、その基本構文や生活に必要な単語などを、毎日繰り返し聴くことで言語野を通して記憶部分に蓄え、さらに、繰り返し声に出して使うことによって、脳のいろいろな部分との連絡回路を形成していく。3歳頃には、もう文字が無くてもことばで周りの人とコミュニケーションがとれるようになる。5歳児の語彙数は1万語以上にもなるという。さらに、多言語使用者を調べてみると、それ

それぞれの言語が「後言語野」の中でうまく分離、独立している。また、五感といわれる「視覚」、「聴覚」、「味覚」、「触覚」、「嗅覚」が各感覚連合野で解釈（認知）され、さらにそれらが統合されて概念が形成されるといったように、互いに連携して働く「共感覚」としてあることが言語発達に大きく関係しているといわれている。（『右脳と左脳』p. 8～17）および（『脳と心』JASTEC 関東東北支部会研究大会講演資料 1997年11月）

さて、子どもが自然に言語を覚えていくことのできる年齢は、およそ9～10歳位の臨界年齢あたりまでといわれているが、これを境に学習をつかさどる脳の領域は右脳から左脳へ、すなわち、直感的な把握から論理的な理解へと切り替わる、ということが最近の定説となっている。聴感覚器官の発達も臨界年齢の頃にほぼ完成し、以後の新たな言語習得は、年齢があがるにつれて少しずつ努力の必要度を増し、美しい発音もしだいに難しくなっていく。臨界年齢を越えてから始める従来の英語教育では、本来、右脳が受け持っている概念的把握が不足し、左脳での学習ばかりが強調されることになる。聞き分けることも美しく発音することも苦勞ばかり多く、結局は英語の蓄積が不足したままで終わることになる。これを医学的に表現するとつぎのようになる。

ウェルニッケに英語のための感性的言語野は形成されず、ブローカに運動性言語野も形成されないため、ただひたすらに日本語の感性的言語野と運動性言語野を使って概念中枢で翻訳しているだけである。（『今こそ第二外国語』JASTEC 関東東北支部会研究大会講演

資料 1997年11月）

また、これは言語学的見地からの事例であるが、荒木博之は多言語・多文化の中の家族の観察から、「子どもには異言語・異文化に対する抵抗感があまりないようだ」、との受けとめ方をしている。

（『日本語が見えると英語もみえる』, p.116）

これも、右脳の活動が活発な子どもと、左脳が明らかに優位に働く大人の違いを言いあてているということにならないだろうか。

ここで注目しなければならないのが右脳の働きである。左脳が言語活動を中心にした知的活動にはたす役割は大きく、「優位脳」と呼ばれているのに対し、「劣位脳」とか「音楽脳」と呼ばれている右脳の働きは、創造的活動、つまり、論理だけでは成立しえないような直感、あるいはひらめきをともなった働きに参与していると考えられている。子どもの「あそび」をとおしての知的活動は、大人のそれとは異なりきわめて直感的で、ときにはすじのとおらない行為が多いことに気づく。これらは、子どもの「あそび」が連想的に発展し、一貫性がない場合が多いことから想像できるように、右脳の活動と言わざるをえない。子どもは出生から数年間という短い期間で基本的なことばとその言語構造をほぼ獲得してしまうのであるが、同時に活発な右脳の活動によって、ことばによって創りあげられた文化の基礎的構造をも学びとっていくのである。

こうした事柄を総合判断するとき、第二言語も母語習得と近似の環境あるいは条件を与えることで最大の学習効果を上げうるのではないかと推測される。

#### 4. 言語とリズム

どのような言語を使う民族でも、使っている言語に由来する歌、踊り、ものがたりなどがある。言語は、その言語を使う者の文化の根源といえる。子どもの文化である「あそび」においても同じことがいえる。「あそび」には常に「ことば」がともなう。子どものコミュニケーションの手段としての「ことば」は、「あそび」とおして発達していく。また、ひとりあそびでも、多くの場合「ことば」がともなう。でたらめことば、でたらめうたは、子どもにとってけっして「でたらめ」であるだけではなく、「ことば」のトレーニングであ

る。

日本語は、文字まで含めて中国、朝鮮半島に源を持つてはいるが、日本は日本であって中国でも朝鮮半島でもない独自の言葉を創り上げた。そのよい例が「ひらがな」であろう。そして、「ひらがな」とそれにともなう発音も、時代とともに変化してきた。現代の我々は、「ゐ」や「ゑ」の発音を知らないし、「言ふ」と「言う」や「てふてふ」と「ちょうちよう」がどう違うかも知らない。旧かなづかいには、そう書き表す理由があったはずである。

つぎの例は日本語と英語の言葉のリズムの特徴をよく表している。( | は拍)

Eeny	meeny	miny	mo,
Catch	a	tigger	by his toe;
If	he	squeals,	let him go;
Eeny	meeny	miny	mo.

どれ	に	し	よ	う	か	な	
か	み	さ	ま	の	い	う	と
お	り						

これは、“Mother Goose”と「わらべうた」からとられた、鬼決めに使われる唱えことばである。両者を比較してみると、「どれにしようかな」では、集まった子どもたちが出している握りこぶしを、一字ずつに拍を等しく割りあてて指さしを移動させていくのに対し、“Eeny meeny miny mo”では、基本的に単語単位で拍をとりながら指さしを移動していく。日本語と英語では、音節（シラブル）の単位が違うのだ。また、“Eeny meeny miny

mo”は、明らかに2または4拍子であるのがわかるが、「どれにしようかな」には明確に識別できる拍子はない。あえていえば、1拍子といえる。たしかに、「わらべうた」の中には2または4拍子にとれる唄が多くみられる。しかし、五線楽譜に書きあらわしてみると、一曲全体の形がうまく整っているとは思えない唄が多く見うけられるのも事実である。小節数が半端であったり拍子の変更が頻繁に起こったりと、西洋音楽の拍子感に慣れた感覚

では楽譜がとて書きにくいのである。民謡にも、たとえば「佐渡おけさ」のように唄の拍子と体の動きが一致しているようにみえない例もある。これは音楽的に悪いといっているのでは決してない。ことばとその動きのからみの中に、バレエなどとは異なる日本独特の美しさを感じるという意味である。これまで、「日本の音楽に3拍子系のものは見あたらない、が、だから2または4拍子であるのか」と漠然と考えてきた。

鷺津名都江は、『わらべうたとナーサリー・ライム』で、従来、言語学や民族音楽学などで考えられてきた、「日本語が2または4拍子的な言語である」との定説に対し、もうひとつ割りきれなさを感じ、日本語が1拍子であるとの仮説的な考察をしている。ここに述べられていることは、つぎのような点に要約される。

- (1) 各言語にはその言語特有の「言語リズム素」があり、その各言語リズム素が子どものあそびうたの動作に影響を及ぼしている。
- (2) 日本語は基本的に1拍子の言語であり、しゃべり方はあらたまった状況になるほど1拍子のリズムが強調され、重々しく弾みがない話し方になる。そのため、日本人の伝統的な民謡は歩くことが基本になっているため、スキップとかギャロップのような弾む動きはほとんどみられない。
- (3) スキップ・リズム（付点八分音符と十六分音符の組みあわせ）のリズム感は西洋と日本では異なっていて、西洋の軽く弾む感じに対し、日本のものは十六分音符の長さもあいまいで付点八分音符と同じ重みをもっている。明治以降、たとえば「なわとび」のような外来の弾んだリズムが「あそび」

にとり入れられるようになったが、使われている唄は重いリズム感の日本的なスキップ・リズムのものが多く見うけられる。

- (4) 日本語の言語リズム素は「ストンピング・リズム」であり、英語は「バウンシング・リズム」である。

我々が外来語をカタカナにして話すときのことを考えてみると、英語本来の抑揚感は失われ、いかにも「日本語」という感じになってしまう。また、英語のスピーキングにおいても同様なことがいえる。日本語は母音止の言語といわれ、言語学的にも音声学的にも世界的に数少ない特殊な部分をもっている。日本語での言語活動では、右脳と左脳の働きが他言語使用者とは異なる動作をすることもわかっている。

母音、lとr、bとvの発音の区別などのよく指摘される部分の他に、いかにも英語らしい、ネイティブに通じるしゃべり方を身につけるためには、このリズム感の違いを克服しなくてはならない。そのためには、「聴いて身につける」以外に方法はないし、幼児の時期から聴き覚えることが、この問題を楽に乗りこえる最善の方法であろう。

## 6. 日本の英語教育の問題点と小学校への英語教育の導入について

日本の早期英語教育は1858年に福沢諭吉によって慶応義塾幼稚舎で始められ、以来、私立学校を中心に発達し成果をあげていた。第二次世界大戦による中断の後復活したが、戦前までと同じくその中心は大都市の私立学校にある。早期英語教育の歴史は比較的古いにもかかわらず、公教育における早期英語教育



は実現されないまま今日に至っている。

長江宏(本学元教授)は、小学校への英語教育の導入の見通しについて、平成9年11月の「教育課程の基準の改善の基本的方針について」の中間まとめをとりあげている。

「これからの時代を担う幼児、児童、生徒の現状や国際化の進展を踏まえ、幼児、児童、生徒を育成する学校教育においては、時代を超越して変わらない調和のとれた人間形成が特に重要であると考え、豊かな人間性や社会性、国際社会に生きる日本人としての自覚を育成すること」を第一のねらいとし、さらに、

- ①豊かな人間性や社会性、自ら考える力を育成すること
- ②自ら学び、自ら考える力を育成すること
- ③ゆとりのある教育活動を展開する中で、基礎・基本の確実な定着を図り、個性を生かす教育を充実すること
- ④各学校が創意工夫を生かし特色ある教育を展開する

等の記述をあげ、④の中で「総合的な学習の時間」(仮称)を創設することによって、国際理解教育とタイアップして外国語会話、さしあたって英語会話という形で実施される見通しと考えられている、と述べている。また、具体的には、「教育課程の基準の改善の基本的方針について」の中間まとめから、以下の6つの項目を課題としてあげている。

#### ①ねらいを明確にする

これは、異文化理解教育としての外国語教育とは何なのか、また異文化理解つまり国際理解教育とは何かなどの、ねらいを明確にすることであろう。いわば導入の理念をしっかりと位置づけるということである。

#### ②カリキュラムへどのように位置づけるか

中間まとめにあるように、「総合的な学習の時間」の編成の中で、位置づけることになる。編成に当たっては、低学年、中学年、高学年と発達段階を考慮して、学習内容を創意工夫することが必要になろう。特に、低学年の生活科や、学級の時間などの関わり、他の学習内容・単元とのバランスなど、解決すべきことがらである。

#### ③カリキュラムの作成

何よりも、各学習段階における指導目標・到達目標の設定が必要である。つまり、月、題材名、ねらい、言語教材、指導方法、指導教材教具、評価などである。

#### ④教材開発の問題

さて、指導計画にしたがって、授業を展開するとなると教材開発の問題が出てくる。例えば、自作するのか、市販教材を活用するのか、テキストやワークブックなどの活用教材をどうするのか、映像教材・コンピュータ教材などをどうするのか、さらには絵カードの類をどうするのかなど、教材開発の問題は大きな課題である。

#### ⑤指導者の問題

総合的な学習の時間で実施するとなると、学級担任が中心になるが、同時にALTとのティーム・ティーチングが主流になってくる。したがって、日本人英語教師の各校への配属が必要になってくる。

#### ⑥研修と中学校との連携の問題

多くの自治体の現状を見ると、担任を助ける日本人・外国人講師の確保に苦しんでいるようである。在住する市民の協力で何とかまかなっているようであるが、指導者不足は否めない。同時に、中学校との連携が必要で、連絡協議会を通して無駄のない早期英語教育を導入したいものである。

(『伝承童謡の諸相』(2), p. 1~5)

現在、これ等の諸問題については英語教育に携わる方たちの論議・研究が進行中であり、各県の指定校での実験授業が始められたばかりで、より具体的内容が明示される段階には至っていない。しかし、これまでの英語の学習内容をそのままにして開始時期を早めるだけでは、「なかなか言葉を聞き分けられるようにならない」という点を抜本的に解決することはできない、という共通認識はできている。小学校への英語教育導入が、これまでの読み書き中心の英語教育に対して、待ったなしに大きな変革を迫るきっかけとなるであろうことは、はっきりとした事実であり、これらの課題のほとんどが多少の違いはあるにしても、就学前の英語教育に同様の課題となってくるであろうことは、容易に想像されることである。

## 2. 具体的内容

子どもの言語獲得についてのさまざまな様相を、いろいろな角度から調べてきたわけだが、では、英語学習を具体化するためにはどのような点に留意していけばよいか。要約するといくつかの点が浮かび上がってくる。

- (1) 右脳の働きが活発な時期、つまり、概念的把握、音楽的要素による把握が活発に行われている臨界年齢前に学習を始める。できれば幼児期(3, 4歳位)から、母語の習得過程に配慮しつつ始める。学習は、これまでの「読み書き」ではなく「聴き話す」ことでコミュニケーションすることに主眼をおく。

- (2) 英語の部分だけの発達を促進するのではなく、できるだけ知的発達全体に配慮しておこなわれるようにする。
- (3) 子どもが日常の「あそび」から多くのことを獲得していく過程を重視し、家族との、あるいは友だちとのかかわりあいの中から自発的に出てくる欲求で、自然に学ぶことのできる環境設定、教材選択、学習計画を考える。
- (4) 体の動き、ことばのリズムを重視する。教材には歌やチャンツを多く取り入れ、覚えやすい英語をめざす。
- (5) 母語習得との関係を十分に配慮する。このためには、日常生活の多くを占める家庭生活を含めた学習内容を考える。
- (6) ガイドブックを作成し、家族の英語教育に対する意識や家庭の英語環境などについても啓発する。

本年度は、教員養成の立場にある我々自身が、本学の公開講座のひとつとして、「マザー・グース・クラブ」という実験教室を開き、これらを考慮した環境設定、教材選択、学習計画について、何をすればどのような結果になるかを探ることとした。

再度、強調しておきたいことは、幼児からみた英語は、あくまでも「あそび」のひとつであるということである。したがって内容は、幼児の自発性の上に成立つよう、また、教えることはその欲求が出てきたときにおこなうように構成することとし、実験項目に対する反応の様子を観察し考察を加えることにした。

おわりに

研究は始めて日も浅く、研究者同士も互い

の分野について十分な理解をしているとはいえない状況の中で、手探りで進められているのが現状である。解決しなくてはならない問題が数多くあり、学生を指導する段階に至るにはまだ相当の時間が必要である。なによりも、研究の中心的存在であった長江宏教授が退職されてしまったことは大きな痛手である。しかし、いくつかの学会に参加して得た情報からは、全国の先生たちが同じように手探りで研究をしていること、我々が考えていたことが基本的には間違った方向ではなかったことなどに意を強くして実験を実施することにした。現在、第3回目を実施し終わっているが、その結果と考察については「早期英語教育の試み」(3)として報告したい。

最後に、ここまでの文をまとめるにあたって、マザー・グース研究グループのメンバーである佐野博美、A.E.Brody、長江宏の各先生方のご指導、ご協力に心から謝意を表したい。

## 参考文献

マザー・グース研究グループ編『伝承童謡の諸相』(2) 1998  
 マザー・グース研究グループ編『子どもと学ぶ楽しい英語』 1998  
 秋葉英則他著『幼児とあそび』理論と実際 労働旬報社 1994  
 三輪弘道編『幼児の心理と保育』 福村出版 1983  
 荒木博之著『日本語が見えると英語も見える』(中公新書1212) 中央公論社 1994  
 中村嘉男他編『脳の科学』 朝倉書店 1988  
 角田忠信著『右脳と左脳』 小学館 昭58  
 角田忠信著『日本人の脳』 大修館書店 1983  
 『新しい幼稚園教育要領とその展開』 チャイルド本社 1989

『児童心理学の進歩』1996年版 金子書房 1996  
 金田一春彦著『日本語』上下 岩波書店 1988  
 鷺津名都江著『わらべうたとナーサリー・ライム』増補版 晩聲社 1997  
 植村研一「脳と心」 JASTEC 関東東北支部会研究大会講演資料 1997年11月30日  
 小川芳雄著『英語教育法』 国語社 1980  
 立間実他著『新英語科教育法』 松柏社 1980  
 五島忠久著『子どもが英語と出あうとき』 杏文堂 1993  
 樋忠彦他編『小学校からの外国語教育』 研究社 1997  
 京都市教育委員会・京都市立永松記念教育センター『自発的な発話を目指した小学校英語カリキュラムの作成』 1996  
 Michael H.Long 著 牧野高吉訳『第2言語習得への招待』 鷹書房弓プレス 1995  
 Heidi Dulay 他著 牧野高吉訳『第2言語の習得』 鷹書房弓プレス 1993  
 コリン・ペーカー著 岡秀夫訳編『バイリンガル教育と第二言語習得』 大修館書店 1996  
 ガレブ・ガテーニョ著 土屋澄男訳『赤ん坊の宇宙』 リーベル出版 1995  
 三島出他著『英語早期教育の必要性』 英宝社 昭59  
 五島忠久監修『児童英語指導法ハンドブック』 杏文堂 1990  
 松川禮子著『小学校に英語がやってきた』 アプリコット 1997  
 諏訪部真他編著『英語の授業実践』 大修館書店 1997  
 加藤友康著『声とことばのトレーニング』 桐書房 1998  
 阿部恵子編著“Let's Sing Together” アプリコット 1997  
 阿部恵子編『こども英語せかい』ワークブック アプリコット 1995  
 中本幹子“Welcome Learning World” アプリコット 1996  
 百々祐利子監修『マザーグースとあそぶ本』 ラボ教育センター 1986